

君のために僕がいる 3

M a r i o & C b i t o s e

井上美珠

Miju Inoue



エタニティ文庫

C o n t e n t s

君のために僕がいる3	5
書き下ろし番外編 幸せな未来	331

君のために僕がいる 3

藤崎改め、星奈万里緒になり、まだ一年も経っていない。

結婚により、姓が変わっても万里緒は万里緒で、何も変わらない日常を過ごしている。夫の名前は星奈千歳。可愛い感じの名前だが、身長も高く、職業は素晴らしい腕を持つ外科医。それこそ、万里緒にはもったいないくらいの人で、大学病院の信頼も厚い、優秀な医師だ。

万里緒自身、消化器内科医という職業であり、同じ職場だからこそ、余計に夫の仕事ぶりがすごいのがわかる。

しかも、かなりの人格者で、怒ったところは見たことがない、というほど穏やかな人だ。だから、喧嘩になるのは、やっぱり万里緒が原因のような気がする。なのに、いつも彼の方から折れてくれて仲直り。自分も千歳のようになれたら、と毎回万里緒は反省するのだった。

そうはいっても、万里緒と千歳はなんだかんだでラブラブな新婚生活を送っている。

クリスマスには一緒に旅行へ行くことになっているし、エッチにも満足している。

ところが、つい先日、そんな千歳と甘い時間を過ごしたあと、衝撃の告白をされた。

突然アメリカで医師免許の更新をしなくては、と言われたのだ。

ついでに、研修もこなしてくるから、二ヶ月はアメリカで過ごすことになる、と。

寝耳に水の発言に、万里緒はしばし呆然と固まるしかない。

当然、心の整理なんか、すぐにつけられるはずもなく。

こうして、万里緒はせっかくのクリスマス旅行を前に、優しくてイケメンで優秀な夫の千歳のことを考えて、悶々とした日々を過ごしていたのだった。

もちろん、旅行は楽しみでもあるのだけれど。

* * *

消化器外科の医師、星奈千歳は、十二月に入っただけで休みを申請した。

平日に三日間のリフレッシュ休暇。もつと一緒に色々なことがしたいという妻のために、クリスマスに旅行の予定を入れたのだ。同じ職場なので一緒にいる時間があるように見えるが、夫婦として過ごす時間は少ない。どこかに行こうと決めなければ、きつといつもと変わらず適当に寝て過ごすに違いないから。

「休みは大丈夫。三日間取らせるよ、星奈」

医局長室で話があると言われて何事かと思ったら、医局長の鈴木から直々にそう言われた。何か面倒なことでも言われるのだろうかと思っただけからホッとした。

「ありがとうございます」

千歳は軽く頭を下げた。

「星奈万里緒とどこかで過ごすつもりなのか？」

消化器外科と消化器内科は密接な関係にあるので交流も多い。そのため、結婚により星奈が二人になった今、万里緒は大概フルネームか旧姓の藤崎と呼ばれている。

「そうですね」

「ひそかに彼女を狙ってたやつも多かったんだぞ。既婚者の俺でも藤崎万里緒は目を引いてたからなあ。朗らかで明るいし、何よりビキニ姿がそそる」

万里緒のビキニ姿の話は本当によく聞く話だ。

千歳も新婚旅行のときに初めて見たのだが、スタイル抜群のビキニ姿には瞬きを忘れて見入ってしまった。

あまり女の裸に興味のなかった千歳が、思わず動いてしまうくらいにそそられた。だが、万里緒は千歳の妻なのだ。他の男から、妻の身体を色目を使って見ていると言われて面白いはずがない。

「その辺も決め手です」

知らず声に不機嫌さがまじっていたのか、医局長が苦笑して言った。

「……悪かったよ。そう怒るな。とにかく、休暇は大丈夫だから」

「ありがとうございます。じゃあ、これからオベナので」

「例の食道がんか……」

「はい。大丈夫です、きちんと術後回復させて、症例の成功率を上げますから」

E大病院は食道がんの手術例は多いが、その内回復して社会復帰する率は七割程度。つまりそれだけ難しい症例なのだ。だからこそ、病院はその成功率を上げたいと思っている。

千歳が言うのと医局長は腕を組んで笑う。

「星奈が言うのと、本当にそうなりそうだな。美山教授がお前をこっちに来させたかったのかわかるよ。……ここを辞めたりしないよな？ 藤崎は何か言っているのか？」

万里緒は、実はE大関連病院の院長の娘なのだ。彼女の叔母が、懇意にしている消化器外科の美山教授に姪の見合い相手を相談し、白羽の矢が立ったのが千歳だった。万里緒と見合いしたのは、そうしたしがらみがきっかけではあったが、あくまでもきっかけに過ぎない。

「彼女と結婚したから、この病院にいるわけではありません」

辞めたりしないか、という言葉には、なんとも答えられない。

「じゃあ、いつか、ここを出ることもあるのか？」

「どうしてそんなことを聞くんですか？」

「美山教授から言われてね。今の学部長の定年に伴^{ともな}って、次期学部長候補に美山教授の名も挙がってる。それに勝つためには、星奈の力が必要だそうだ」

美山教授が医学部長の候補に挙がっているのは知っていた。美山教授の率いる消化器外科の功績が良いのが主な候補理由。学部長になるからには、それだけの経管手腕や部下を率いる能力も必要とされる。つまり、教授の今後を左右するのは、消化器外科の功績次第と言うことだ。

そのためだけに千歳が呼び寄せられたとは思ってないが、この大学に引き留める意図はわかる。

「研修医の頃から、星奈は違っていた。度胸もあって、手技は確実に覚えて学習した。知識も豊富、選ばれてアメリカ留学も果たした。正直俺よりも、素晴らしい医師になったと思ってる。わかっているか、星奈。お前が辞めたらうちの科は極端に傾^たく」

「……医局長、僕は辞めるとは言ってません」

辞めるとは言ってない。なのにどうしてそんなことを言われるのかわからない。

「藤崎と結婚した時点でお前が簡単に辞めるとは思っていないさ。だが、辞めるなよ星奈。」

お前がいてこそその消化器外科だからな。他の誰も、お前の代わりにはならないんだから」

万里緒との結婚は、美山教授にとってそれだけ意味のあることだったのだから。

「藤崎と結婚したのは、藤崎の実家も視野に入れてるからだろう？ 見合いで、ただ好きだから結婚したなんてことは、ないと思ってる」

病院から引き留められるのは、それだけ医師として頼りにされているからだ。医師としてそこまで来たのかと思うと、研修医時代の大変だった時期も報われる思いがする。

しかし、大切な家族である万里緒のことまで、変な意味に取られるのは気分が悪かった。「お前が休暇を申請すれば優先する。そうしろと言われているからな。むしろ俺もそうしたい。星奈を手放せないからな」

こんな病院だっただろうか、と千歳は思った。

自分が医師になったのは、ただ学校の成績が良かったからだだった。そして、病気で亡くなった母のような人を助けられるなら、と消化器外科の医師になった。医師になって、功績を上げ、留学をさせてもらい、海外支援活動にも行かせてもらった。E大病院には、本当にたくさんの経験を積ませてもらった。それだけ医師を育てるということをしてくれる病院なのだと思うていた。

「……休暇の件、ありがとうございます」

「いや、いい。こっちこそすまなかつたな、こんな話をして」

「いえ」

千歳はどうか笑みを浮かべた。失礼します、と言って医局長室を出る。部屋を出た瞬間、大きなため息が出た。なんとも言えない、気分が悪さを感じる。

「ただクリスマスを過ぎすだけで、なんでこんなこと」

余計なことを言わないのは、千歳の大人としての処世術しよせいじゆつのようなもの。

万里緒のことを、まるで千歳を引き留めるための道具のように言われたのが、何とも腹立たしかった。確かに、美山教授から万里緒との見合いを打診されたとき、何か含みがあることはわかっていた。もしこのまま万里緒と結婚したら、ということをもっと考えなかったわけではない。

けれど、そんなことが気にならないくらい、彼女のことを好きになってしまった。万里緒をタバコ臭くしたくないという理由で、ずっと吸っていたタバコをやめようと考えるくらいには、大切だった。

それほど大切な万里緒との結婚を、打算的にとらえられているというのが、本当に気に食わない。もしかすると、医局長以外にも、自分たちの結婚はそう思われているかもしれない。それを万里緒が感じているのだとしたら……

そうだとしたら、あの千歳に遠慮してばかりの行動にもうなずける。打算なんてない。ただ好きで結婚しただけ。

それなのに、周りの思惑はそうではないということを、今日改めて実感した。

千歳は深いため息とともに、万里緒を思った。同じ院内で働く妻は、何をしているのだろうか。今すぐ万里緒に会って、抱きしめてキスをしたいと思った。

だが、仕事場でそんなことができるわけもなく、もう一度、ため息。

仕方なく千歳は、このイライラを静めるために喫煙所に向かった。万里緒のためにせっかく禁煙しようと思っっているのに、なかなか上手うまくないかなんと思いつながら。

2

あと一週間と少しでクリスマススイブという年の暮れ。

「五年早いぜ、スーパードリフト」

「何ですか」

星奈万里緒が医局に戻ってすぐ、同僚のベテラン医師の阿部あべから言われたのは休暇のこと。まだ申請しただけなのに、なんでもう知っているんだと聞きたい。

「後輩がいるからってな、まだ五年目のペーペーがクリスマスを休むなんて、早すぎる」

万里緒と夫の千歳はそろって、二十三日は仕事で日直をすることになっている。しかし、その翌日の二十四日から、夫婦水入らずで二泊三日の旅行を予定していた。場所は箱根のオーベルジュ。オーベルジュというのは、簡単に言えば、宿泊施設のついたレストランのことだ。

「それ、どういう根拠があるんですか？ だいたい、私がクリスマススを休むって、なんで阿部先生が知ってるんですか？」

「医局長に聞いたからだよ。星奈と出かけんのかよ」

「そうですよ。出かけますよ、旦那さんでもん」

十年早いと言われたのは、きっとクリスマススを二十四、二十五と休むからだ。

「クリスマススに出かけて、何するんだよ？ ヤルために行くのか？」

「ち、違いますよ！ もう、セクハラです！ 箱根へは、温泉に浸かりに行くんです！」

万里緒が赤くなって否定すると、阿部は鼻で笑った。

「星奈にも言ったけどさ」

「はあっ!? 何て？」

「マリオはクリスマスス休みらしいけど、二人でよろしくしてくるのか？ って」

万里緒の顔が引きつった。あまりのことに返す言葉が出てこない。

どうしてそんなことを言うのだろう。この人が万里緒の先輩じゃなくて、ついでに腕

も悪かったら、どついてやるのに。

「星奈笑ってたぜ。相変わらずストレートに言いますね、ってさ」

阿部は、はっ、と力なく笑って万里緒を見る。

「星奈って昔から、からかえねーんだよなあ。何言っても穏やかに言い返すし。こっちがからかってるのわかってるから、まともに相手しないんだらうけどさ。お前、星奈が旦那で満足か？」

万里緒は眉を寄せる。

「満足ですよ」

「マジで？」

「だからなんで、そういうことばかり言うんですか……やめてくださいよ」

「星奈がやっているとところ想像つかないんだよ。まあ、あれだけイイ男だし童貞なわけないと思うけどさあ。お前と結婚もしてるんだし」

もうやだ、と思ってたため息をつくとき、医局のドアを誰かが叩いた。

ん？ と思ってた振り向くと、そこには多少呆れた顔をしている夫の千歳が立っていた。片手にはカルテ。万里緒は思わず目を見開く。

さっきの話聞かれてた？ なんてこったい！

「阿部先生に紹介された患者の詳しい情報を聞きに来たんですけど」

「おお、噂をすれば影？」

阿部が笑いながらそう言った。

けれど患者のことには真面目な阿部は、医局の応接セットに千歳を座らせると、カルテを見ながら詳しく患者について説明し始めた。

ひとしきり話を聞くと、千歳はカルテを持って立ち上がる。

「ラウンドしてきます」

そんな千歳に、クールだねえ、と阿部がすかさず言う。

「マリオがいるのに、スルーか？」

「仕事中にイチャついてもいいなら、そうしますけど」

千歳が万里緒を見てにこりと笑う。その笑顔、素敵すぎ。

「じゃあ、またね、万里緒」

そうして千歳は、あっさりと消化器内科の医局を出ていった。

マジでスマートすぎる、と思っていると、阿部が肩をすくめる。

「星奈とお前って、仲良いのか？」

「何ですか」

またか、と思いながら聞くと、だつてさ、と言った。

「星奈とお前、見合いじゃん。お前と結婚したら、星奈はこの病院辞めづらいだろうし。

辞められないと思うからさ」

「星奈先生は、この病院を辞めたいなんて、言ったことないです」

「違うって」

阿部は手を振って笑いながら、万里緒を見る。

「お前、藤崎病院の娘だろ。で、叔母さんは成瀬中央病院なるせの院長夫人。ある意味、こここのの附属病院的な病院の娘を振るなんてありえんだろ。で、結婚したからには、辞めようと思っても辞められないだろうな。お前のバックがデカすぎて」

確かに千歳が万里緒と見合いしたのは、そうしたがらみがあったからだと聞いている。

だけど万里緒と結婚したせいで、この病院を辞めようと思っても、辞められなくなったなんて思ったこともなかった。

「そうでしょうか？」

「そうだろうよ。星奈、好きで結婚したのか怪しいよなあ。あの通り、お前の前では淡泊だし？」

周りから言われると途端に不安になってしまう。でもプライベートの千歳はそんなことない。万里緒だけが知っている千歳は、淡泊じゃないと思う。

「ちゃんと、好きで結婚しましたよ。なんでそういうこと言うんですか？ 信じられない」

「だって、お前いきなり星奈みたいなイイ男捕まえたからさ。まあ、悪かったよ。そんなマジな顔すんな」

マジな顔しますよ、と思いつながら少しだけ笑って見せた。以前の万里緒だったら、あからさまに落ち込んでいたと思う。でも、今はそうじゃないことがわかってるから。

千歳は万里緒のことが好きだとわかっている。

ただ、いつも思うのは、千歳はE大の看板にもなっている優秀な医師で、万里緒はごく平凡な内科医であるということ。

スーパードクターの千歳の側について引け目を感じてしまうのは当然。初めて仕事を一緒にしたときからそうだった。

お互いが好き合って結婚したのは間違いないが、万里緒が藤崎家の娘だったから千歳と会えたというのも確かだと思う。

千歳の隣にいる自分には、一体何があるのだろうかと思ってしまう。もうすぐクリスマスというのに、少しだけ悲しくなった。

* * *

そんな思いを抱えながら家に帰ると、千歳が何故か荷造りをしていた。明日は土曜日で、確か午前中のみ出勤だと言っていた。万里緒も同じだから覚えている。

「星奈先生、どこか……行くんですか？」

荷物のサイズから、来月のアメリカ行き荷造りではないと思って聞いてみる。

「ストレス発散を兼ねて、北海道までスノボをしに行ってくる。日曜の夜遅くまで家を空けるから」

いきなりじゃないですか？ という言葉をなんとか呑み込んで、万里緒はソファアに座り、スーツケースを閉める千歳の後ろ姿を見た。

「あの、ボードとかは？」

そういえば、趣味はスノボと登山と言っていたような気がする。しかし、一緒に住むこのマンションで、スノーボードの板を見たことはない。

「ボードは知也の実家に置いてもらった。引き取りも兼ねて遊んでくる」

知也というのは、万里緒の大学時代からの友人である来生知也のことだ。実は千歳とも同じ病院で働いていたことがあり、仲がいいとあとから知った。

「早く言ってくればいいのに。一日前に伝えるっていうのはだめだと思います」

万里緒が言うと千歳はスーツケースを立てながら、ごめん、と言った。

「昨日急に思い立ったんだ。万里緒は当直明けで寝てたし、今日は出勤したからね。言
うのが遅くなつてごめん」

気を遣つたような言い方をして、千歳は万里緒の頭を撫でた。頭を撫でてもらうなん
て、この人以外にしてもらつたことがない。でも、こういうときはズルい動作だと思う。

「私、お留守番ですか？」

「そうだね」

にこ、と笑つて言うので、本当にズルいと思う。万里緒はその笑顔に弱いから。

「もし一緒に行つても万里緒は暇だと思う。僕と知也は上級コースで滑るし、知也の彼
女はスキーだけど、やっぱり同じ上級者コースだから」

「千幸ちゃんも行くんですか？」

「うん。万里緒は滑れないでしょ？ ウエアもないし」

ええ、もちろん滑れませんとも。だけど、万里緒は滑れないでしょ、ウエアもないし、
と当然のように言われてちよつとだけカチンときた。滑れないからつて、何も言わず、
いきなり明日行つてくる、と一日前に言うのは、酷いんじゃないですか。

「お昼から行くんですか？」

「いや、朝から。休日出勤の代休が残つてて、早く取つてくれて言われたから、明日
取ることにした。万里緒より早く出るから、起こしたらごめん」

半日勤務だと言っていたのに、わざわざ休みを取るほどスノボがしたかったのだろう
か。ストレス発散も兼ねて、と言つたからきつとたくさん身体を動かしてぱーつと発散
してきたのだろう。

その間、万里緒は一人で留守番。

なんでいきなり決めてしまうのかな、と思う。確かにストレス発散は必要だけど、普
通奥さんに何の相談もなく、勝手に決めるか？ と心の中で愚痴った。

千歳にもきつとストレスを発散したくなるほどの何かがあったのだろうけれど。

一体何があったの、と聞ければ奥さんとして上等なのだろうが。

今の万里緒はどうしても感情が優先して、つい拗ねたように言つてしまう。

「そうですか。じゃあ、いつてらっしゃい。私、今日は自分の部屋で寝ますので」

そうして立ち上がり、なるべく千歳の顔を見ないように自分の部屋へ行こうとすると、
後ろから千歳に腕を引かれた。

「万里緒、急に決めて悪かったよ」

万里緒が不機嫌になったのを、千歳は察しているだろう。だけど、謝られたところで
今の万里緒の気分が良くなるわけではない。

「別に、私つてば星奈先生の奥さんだけど、プライベートにまで口出ししたりしません。
それに、私は星奈先生の趣味にはついて行けませんもの。来週はオーベルジュに連れて

行ってくれるそうなので、それに期待します。じゃあ、お休みなさい」

我ながら、こんなことでここまで拗ねることもないだろうと思うのだが。

でも、千歳はどうせ万里緒にはできないことだから、と勝手に決めつけて行ってしまうのだ。自由なところのある千歳だからしょうがないのかもしれないけれど。

ため息を吐いて、できるだけ優しく腕を振り解くと、もう一度腕を引かれる。

「万里緒、ごめん」

「いいですよ、もう」

「いいですって顔じゃないよ」

「でも、いいんです！ 行ってきてください。最近、確かに休みなく働いてるし、息抜きは必要ですもん」

眉を寄せていた千歳は、少し考えるように瞬きをしたあと、掴んでいた腕を放した。

そのまま、万里緒の後頭部に手をやって引き寄せてくる。顔が近づいて、キスをされるのだとわかった。

でも、こんな気持ちでしたくなかったから、腕を突っ張って拒む。けれど、その腕ごと千歳に抱きしめられた。

「や……ん」

深いキスをされて、強く抱きしめられる。何度も角度を変えて目がくらむようなキス

をされ、もう限界というときにようやく解放される。

「急に決めて悪かったよ。本当にごめん」

抱きしめられたまま言われて、万里緒は唇を噛む。

千歳にも色々あるのだから、ここは普通に送り出すべきだとわかっている。

千歳は家で仕事の話をしていない。きっと万里緒以上にストレスのたまることも多いのだろう。千歳が仕事の話をしていないのは、もしかすると万里緒に対する千歳なりの配慮なのかもしれない。

「いいんです、本当に。行ってきてください。ストレス発散でしょ？」

こんなことくらいで拗ねるなんて、本当に馬鹿だと再認識。

千歳の腕から出ると、万里緒は安心させるように笑みを浮かべる。そして千歳に、お休みなさいと言ってから自分の部屋に行った。

ドアを閉めてベッドにダイブする。当直明けで仕事をしてきた身体は限界だった。

「明日から星奈先生いない。寂しい……」

素直にこう言えばよかったのかもしれない。さっきのやり取りは初めから喧嘩腰だった。

ただでさえ、万里緒は千歳と釣り合わないのでは、と思っていたときだっただけに、なんだか落ち込んでしまう。

千歳はいつだって優しい。なのに、万里緒は千歳に迷惑をかけて、些細なことで怒って、拗ねるだけ。

そんな万里緒をいつも許してくれているのだから、千歳が出かけたときには、自由にどこへでも行かせてあげればいいのに。

本当に自分は心が狭いなと思いつつながら、万里緒は目を閉じた。

* * *

「万里緒、行ってきます」

自分のベッドで寝ていた万里緒は、千歳に頭を撫でられて、行ってきますと言われたところで目が覚めた。

「星奈先生？」

「明日帰ってくるから」

そう言って、千歳は万里緒の額にキスをした。それから頬に手をやって、唇を重ねる。「……っん」

唇を挟み込むようなキスをされたあと、一度だけ舌が万里緒の舌に絡まって離れた。朝にしては濃厚なキス。

「も、一回」

目を開けて千歳を見上げると、苦笑した顔。

「もう一回だけ」

「わかりました」

千歳が身を屈めて、二人の唇が重なる。万里緒から舌を絡ませて、千歳の背を撫でる。唇を離し間近で見つめ合った。万里緒はそっと口を開く。

「昨日は、ごめんなさい……千歳」

「悪いのは僕の方でしょ？ 急に決めてごめん」

万里緒の大好きな笑みを浮かべた千歳に頬を撫でられる。そうしてもう一度、濃厚にキスをされた。

すでに身体の中が疼くようになっていて、キスが気持ちよくて仕方ない。

「だめだな、離れがたくなる」

濡れた音を立てて唇が離れた。離れがたくなると言うのにこりと笑う唇が光っている。その唇を拭いてやって、万里緒は言った。

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

千歳は明日には帰ってくるのだから。

そう思いながら部屋のドアを閉める背中を見送る。

「馬鹿だなあ、私ってば」

もうすぐクリスマス。その日は千歳と一日中一緒にいられるというのに。時間は朝の六時半。

ちょうどいい時間だと思いつつながら、万里緒は身体を起こして、身支度を整えるために自分の部屋を出た。

3

「俺、万里緒も連れて来るのかと思ってました」

迎えに来てくれた車の中で、運転席に座る後輩医師の来生知也からそう言われた。それは、ある意味千歳への非難のように聞こえた。助手席には智也の彼女の増田千幸が座っている。

「連れて来ようと思ってなかったし」

そう言うのと、千幸はこちらを見て、目を瞬かせる。

「星奈先生、冷たいですね。そういう言い方って……」

冷たい言い方と言われることは多くある。元々、千歳の言い方が淡々としているので、表情もなく喋るとそう思われるようなのだ。千歳にとっては普通なのだが、と思いつつもここは大人なので我慢する。

「そうかも。増田さん、タバコ吸っても大丈夫？」

増田千幸も知也と同じく万里緒の友達。大学卒業以来しばらく連絡を取ってなかったらしいが、最近旧交が復活したらしく、たまにメールや電話をしている。

「大丈夫ですよ。知也もずっと吸ってるし」

「ありがとう」

千歳はジッポーを取り出してタバコを啜えた。それから火をつけて、一口吸う。窓を開けて煙を吐くと、少しだけクラクラした。

「しばらく吸ってなかったのに、やめてなかったんですね」

「うん。でも、さすがに多くは吸えなくなっただよ。もう少ししたら、やめられそうだよ」
本当ですか？と言われたので、バックミラー越しに笑って見せた。

「それにしても、いきなりスノボしたいって……何かありましたか？」

「まあ、少しだけね」

「何があったんですか？ 万里緒と喧嘩ですか？」

「いや。ここに来る前に少し喧嘩っぽいことしてきたけど」

千歳が相談もなくいきなり北海道に行くと言ったから、万里緒を不機嫌にさせてしまった。今回は全面的に千歳が悪い。ただ、このまま何もせず家にいるとストレスが増すと思ったのだ。万里緒にも心配されそうだし、最悪素っ気ない態度を取ってしまう可能性があった。

「じゃあ、なんですか？」

「なんですか、と言われても大学のしがらみについては、あまり言いたくない。だからストレス発散のため。それだけ伝えた。」

「万里緒、連れてくればよかったのに」

「万里緒を連れてきたら、万里緒がタバコ臭くなるしね」

「は？」

聞き返されたが二度言う気はなかった。

「万里緒がタバコ臭くなるから、連れてこなかったんですか？」

「そう」

「そんな理由で？」

「うん」

知也は意味がわからないというふう^に首を振った。

それは千歳のこだわりだった。けれど千幸は、助手席からまじまじと千歳を見てきた。

「どうかしたの、増田さん」

「……さっきは冷たいって言ったんですけど……星奈先生って、ちゃんと万里緒ちゃんのことを好きなんですネ。すみません、変なこと言って」

改めて言われて、煙を外に吐き出す。

「好きだよ」

迷いなく答えたが内心、馬鹿みたいに照れている。

万里緒が好きだから、万里緒をタバコ臭くしたくなかった。つまり、それだけタバコを吸うと自分でもわかっていた。その理由はもちろん上司から言われたこと。

万里緒との結婚で周りが面倒になってきたことは確かだ。ただ好きな人と結婚したと言うのに、そのバックが大きいからってなんなんだろうと思う。

こういうのが大病院のしがらみなのかと思うと、辟易する。

ここに万里緒を連れてこなかった本当の理由は、イライラしている自分を見せたくないから。こんなことを考えて不機嫌な千歳を見せたくないし、好きな人に不機嫌な態度を取りたくないから。

しかし、何も言わずに置いてきたのは、ちょっと後悔。

万里緒の寂しそうな顔が脳裏に浮かぶと同時に、出がけにベッドの上でしたキスの感触を思い出す。

やっぱり一人で来るんじゃないなかったかも、と千歳は再度後悔していた。

* * *

「星奈先生、まだやるんですか？」

知也がそう言って、リフトに歩いて行こうとする千歳を引き留めた。

すでに知也の彼女、千幸は疲れたからと店に入って温かい物を飲んでいる。

「疲れてるだろ？ 知也もホテルの部屋で増田さんと休んでいいけど」

「星奈先生一人でやるんですか？」

「もう少し疲れるまでやりたい」

知也は疲れた顔をしていた。上級ゲレンデを何往復もしていれば、疲れるのは当たり前だ。千歳も疲れていたが、もっと疲れたい気分だった。

「星奈先生、これ以上はダメですよ。一緒にホテルに帰りましょう」

「一人で帰って」

ストレス発散のために北海道まで来て、ちっともストレス発散になっていない。明日には帰るというのに、いくら身体を動かしても心が晴れなかった。

「どうしたんですか？ なんか、ちよっと荒れてませんか？」

「そんなことない」

そんなことあるくせに、と思いつながら知也から目線を逸らす。

「ありますよ。相変わらず、スノボの腕はプロ級ですけど、滑り方がなんだかイライラをぶつけているような感じで。もしかして、職場で何かありました？」

職場で何か、と言われて、ため息をつく。

「別に。あと一回だけ滑ったら帰るよ」

「万里緒のこと、なんか言われたんですか？ 星奈先生、病院に引き留められてるでしょう？」

知也を見ると、大きく息を吐いた。気温は氷点下なので、白い息が口元を覆った。

「北海道病院でも、万里緒と結婚させたのは星奈先生を引き留めるためだって噂が……万里緒の前では言わないけど。万里緒もそんなことを言われてるって、薄々は知ってると思います」

万里緒が知っているというのとは何となく予想できる。以前、万里緒から、しがらみで会ってくれたんでしょ？ と言われたことがあったから。万里緒は、千歳に対してどこか引け目を感じているように思う。自信のなさが態度に表れているから。

「周りは万里緒と僕を、誰が結婚させたって言ってるわけ？」

「美山教授です。俺はそんなことないって知ってます。二人を知っているし、でも、見

合いが上手うまくいったことは、美山教授にとって星奈先生を病院に引き留めるひとつの要素になったろうって思います。万里緒は、E大を支援する藤崎病院の娘だから」

しがらみって言うのは、こんなところにまで及ぶのかと思う。

選んだ相手がたまたま、大病院のお嬢様だっただけなのに。

確かに見合いをしたときは、しぶしぶだった。会いたいと思って会ったわけではなかった。でも、そんな相手に惹かれて好きになって、結婚したのは自分の意思なのに。

「星奈先生を辞めさせたくないですよ」

「余計に辞めなくなつた。そんな目で見られてるのか？ 僕と万里緒は」

「でも辞めてしまったら、E大に関連した病院には行けなくなります」

言われた言葉に思わず笑つた。病院は日本だけではないから、別に気にしない。

しかし、もし辞めてアメリカに行くとしたら、万里緒はどうするのだろうかと思う。

ついてきてくれると思うが、万里緒を千歳の事情に巻き込んで辞めさせるのも、と思う。

「結婚してる理由が誤解されているなら……その、病院スタッフの前でイチャついてみたらどうですか？」

「はい？」

「結婚したのが万里緒のバックのせいだと思われなように、ですけど」

人前でイチャつく。その言葉に思わず眉を寄せた。千歳は、そういうのを人前でする

のが苦手だ。イチャつくも何も、病院にいるときは仕事 중이다。仕事の中にそんなことできるわけない。

「イチャつく件はパス」

「でも、星奈先生と万里緒って、一緒にいても夫婦っぽく見えないというか。星奈先生は、甘い雰囲気なんてなさそうだし、万里緒は万里緒で仕事中はキツパリしすぎて、旦那がいるように思えないしで」

夫婦のように見えないと、誰かに言われたことがある。自分でもたまに自覚するときもある。それは互いに、病院では仕事に徹しているからではないかと思う。そこに甘い雰囲気なんてない。むしろあつてはいけないと思うのだが。

「……知也、ホテルに帰つてて。やっぱり滑ってくる」

千歳がにこりと笑つて言うのと、白い息を吐いた知也はうなずいた。

「もう暗くなつてますから、気をつけてくださいいね」

「わかつた。じゃあ」

そうか、自分たちはあまり夫婦に見えないのか。そう思いながら千歳は万里緒を思った。万里緒は自分が今まで付き合ってきた女たちとは、性格も容姿も明らかに違う。千歳の好みは色白でふわりとした雰囲気可愛い系だと思つてた。でも万里緒は違う。

千歳の前ではグジグジしたところがあるし、よく泣いて笑う。顔立ちはこちらかとい

うと綺麗系。スタイルは抜群で、もう少し背が高かったらモデルでも通用するかもしれない。

少し下がり気味の大きな目には付け睫毛まつげのような長い睫毛が縁取っていて、綺麗な服が似合う人。それでいて、仕事ではキツパリしたところがあり、患者に対しては真面目で丁寧だ。

そんな彼女を心から好きだと思う。

でも、周囲にいる人間にはその気持ちは見えないらしい。

考え事をしながら、千歳は上級者コースを一気に滑り終えて、肩で大きく息を吐く。

「明日、早く帰ろう」

万里緒に会いたいと思った。

置いてきたことを後悔しながら、万里緒の笑顔を思い浮かべる。

結局、どんなときだって万里緒の側がいいんじゃないか、と今さらながらに気づく。

そうして千歳は、ホテルに戻ったらすぐに、明日の飛行機を早い便に変更しようと考えていた。

* * *

知也と千幸に謝って、千歳は一足早く、昼過ぎに東京へ着く便で帰ることにした。帰宅してリビングのドアを開けると、ソファアに座っていた万里緒は驚いたように見上げてきた。

「お帰りなさい、星奈先生。早かったですね」

「予定より早い便で帰ってきたから」

自分で予定を決めておきながら、本当に何をやっているんだろう、と思う。それでも一刻も早く家に帰って万里緒に会いたかったのだ。

「今起きたの？」

万里緒は、起きたばかりのようなルームウェアを着ていた。モコモコしているワンピースに、同じようにモコモコした靴下。

「さっき、お風呂入ったんです。ずっと寝てて、何もしたくなかったし」

「そう。どうりでいい匂いがする」

万里緒の頭に鼻を寄せると、シャンプーの香りがした。

頭にキスをして、それから頬にキスをする。

それでスイッチが入った。万里緒に会いたいと思って帰ってきたから余計に。

キスをして抱きしめて、抱き上げると万里緒は瞬まばたきをした。

「星奈先生………したいの？」

「うん」

短く答えて、万里緒が抵抗しないのをいいことにそのまま寝室へ連れ込む。

「星奈先生」

「なに？」

「今度は、スキーとかスノボできなくてもついて行きますから。なんか、置いて行かれたように寂しかったし」

「ごめん。本当に悪かったよ」

そう言って小さくキスをして万里緒の首元に顔を埋める。

「星奈先生、ゴム、してもらってもいい？」

まだ二人でいたいと言う万里緒の要望はもちろん聞くが、来年には妊娠してもらいたいと思っている。それでも今は万里緒の希望を了承した。

「わかりました」

そうしてゴムを用意してから、ベッドの上で万里緒の身体を抱きしめる。

この温もりだ。千歳は万里緒の身体に堪らない気持ちになった。

* * *

千歳は昨日、突然思い立ったように北海道へ行ってしまった。

けれど万里緒は、千歳から一緒に行こうとは言われなかった。

そのことが、すごく寂しかったし、なんでと拗ねる気持ちもある。

モヤモヤした気持ちを抱えたまま、万里緒はその日、お風呂にも入らないで眠った。

翌日は休み。万里緒は朝お風呂へ入り、モコモコのワンピースと靴下を履く。特にやることもないので、結局もう一度ベッドに入って眠った。

そうして昼過ぎに起きた万里緒は、しんとしたリビングに入ってソファに座る。

休みに千歳がないことなんて珍しくないのに、何故か寂しくて仕方がない。

はあ、とため息をついたところで、玄関を開ける音が聞こえた。

まさかと思っただけで、リビングのドアを開けて千歳が入ってきた。帰ってくるのは今日の夜遅くと聞いていたのに。

「今起きたの？」

千歳は万里緒の格好を見てそう言った。確かに、今はお昼過ぎだから寝巻を着ている時間ではない。

「さっき、お風呂入ったんです。ずっと寝てて、何もしたくなかったし」

「そう。どうりでいい匂いがある」

千歳はそう言って、万里緒を抱きしめた。顎を掴まれ、上を向かされてそのままキス

をされる。万里緒の身体を抱き上げた千歳の身体は、すぐく熱かった。

「星奈先生……したいの？」

「うん」

短く答えるのはいつものこと。万里緒は千歳に運ばれるまま特に抵抗しなかった。

千歳と愛し合うのは好きだから。

「星奈先生」

「なに？」

「今度は、スキーとかスノボできなくてもついて行きますから。なんか、置いて行かれたようで寂しかったし」

昨日は言えなかった本音を伝えて、見上げると千歳が笑う。

寝室のドアは開いていた。だからそのまま万里緒はベッドに下ろされる。

「ごめん。本当に悪かったよ」

そう言っただけで小さくキスをして万里緒の首元に顔を埋める。千歳の熱い身体が覆いかぶさって、思わず甘いため息を漏らしてしまう。

「星奈先生、ゴム、してもらってもいい？」

まだ二人でいたい。だっただけで、こんなことくらいで、不安になって気持ちを確認合ったりしている。万里緒は結局いつも千歳に甘えている気がしているから。

「わかりました」

了承した千歳は、近くにあるチェストからコンドームを取り出す。それを枕元にいくつか置いたのを見て、何回かするのかもしれないとドキドキした。

抱きしめてくる千歳の身体の熱が、否応なく万里緒の身体も高めていく。キスをされて、それがどんどん深くなっていく。

万里緒は自らも舌を絡めて千歳の背を抱きしめた。その間にも、千歳にワンピースの裾を持ち上げられ、万里緒の胸が揺れながら顔を出す。

「こういうとき、下着をつけていないといいね」

唇を離した千歳にそう言われて、瞬きをする。

「そうですか？」

「うん。すぐに、触れるからね」

そう言って温かい手が万里緒の胸を覆う。そして揉み上げて、胸の先の方を指で摘み転がされる。

「ん……っ」

そこに触れられると声が出た。その声に導かれるように、千歳の唇が硬くなった胸の先に近づいていく。濡れた舌がそこを撫でて、開いた唇にジュツと音を立てて吞まれた。何度もされていることだけど、そのたびに違う快感が引き出される。

舌と唇で胸を愛撫あいぶされながら、千歳の手は万里緒の腕を撫なでて、剥むき出しになっている腹部へたどり着く。ヘソのあたりを円を描くように撫で、腰にずらされた手がショーツにかかった。

万里緒は膝を軽く閉じて、ショーツが下げられていくのを見る。モコモコの靴下はそのままに、ショーツが取り去られ、千歳が万里緒の足を開いた。

足の間を千歳に見られて、万里緒は恥ずかしさに目を閉じる。その間にも、千歳の手が足をたどって足の付け根を触ってくる。さらに、その部分にキスをされ、万里緒の身体が震えた。

足の付け根を撫でられながら、秘めた部分に吐息を感じる。次の瞬間、濡れた柔らかい感触がそこを下から上へと撫でるように移動した。それが千歳の舌だとわかって、万里緒は息を詰める。

何度も撫でるように舐められて、しだいに潤うるってきたそこからびちゃびちゃと濡れた音が聞こえてくる。さらに、尖とがった部分を唇で吸われて、万里緒はその刺激に足の指を丸めた。

「あっ……っ」

その間にも、万里緒は千歳に胸を揺らされるように揉もまれたり、脇腹を撫でられたり、臀部でぶを撫でられたりされるわけで。

千歳に触られるたびに身体が感じて堪たらない気持ちになっていく。

秘めた部分を舐めていた舌がゆっくりりと離れて、その喪失感にさえ感じてしまう。千歳の身体が万里緒から少し離れる。そして、シャツを脱ぐ気配がした。

千歳が離れたことで、とたんに寒くなった万里緒が腕を擦こると、千歳がすぐに布団ふとんで二人の身体を覆おほった。そうして、千歳はパンツのベルトに手をかけて、下着ごとそれを見つめず。

枕元に手を伸ばし、コンドームのパッケージを開けて、反応しきった自分のモノに被せていく。万里緒の目にも千歳のそこが興奮しているのが見えて、勝手に下半身う下半身が疼うずいてしまう。

「千歳、きて」

千歳の腕を軽く引くと、腰が近づいてくる。それによって、さらに大きく足が開いて、千歳の目の前に秘めた部分が晒さらされるが、構わない。

「千歳……っ」

「わかってる」

そう言って千歳が万里緒のそこに自身をあてがう。そうして、ゆっくりと、焦こらすように万里緒の中に入ってくるので、堪たえず声を出してしまう。

「はやく……っ」

万里緒の要求通り、千歳のものが奥まで届いたとき、声にならない声が出た。千歳が欲しくて堪らないみたいに、自然と腰が浮き上がって身体が反応する。

「そんなに狭くすると、早く終わるよ、万里緒」
ため息をつくように言われて、だって、と思う。

「寂しかった。急に、これからは、行かないで」

万里緒が言うと、頬に千歳の大きな手が触れる。

「わかった。ごめん、万里緒」

そう言って、腰を動かされる。その動きにあわせて、肌同士がぶつかる音が聞こえる。音にまじって、下半身の濡れた音までが聞こえてくる。実際には聞こえていないのかも知れないが、千歳が動くたびに万里緒の中が潤っていくのが、わかるから。

「あっ、あっ……ん」

声を出してしまうのはしょうがないこと。

だって、千歳を待っていた。千歳が好きで堪らないから。

万里緒の名を呼ぶ千歳の低い声に、万里緒の中が反応する。

これ以上なくらい一つになりたくて、万里緒は千歳に向かって腕を伸ばした。

千歳は腰を揺らしながらそれに応えて、万里緒の身体を強く抱きしめる。

万里緒は、大好きな人の確かな重みを感じながら、深いキスを繰り返すのだった。

4

月曜の朝。今日から仕事ですよ、と思いつながらうつ伏せになり、肘をついて上半身だけを起こすが、すぐにそのままベッドへ突っ伏した。視線を移すと、そこにはごみ箱。夫婦の寝室のごみ箱は、それなりに卑猥なものでいっぱいだ。ティッシュの山ができているし、使用済みの避妊具も見え隠れしている。

スノーボードをしに行く土曜日の早朝に出て行った夫は、翌日の昼過ぎ、突然帰ってきた。

夫は帰るなり、まるでスイッチが入ったように万里緒を抱きかかえて寝室へ。それから布団の中で愛し合った。いつもと同じ夫の重みが気持ちよくて、万里緒はその感覚に溺れた。

今回、千歳は万里緒になんの相談もせずにスノーボードへ行ったらけれど、夫には何か、急にストレス発散を思い立つような悩みがあるのかもしれない。

千歳は何の理由もなく、万里緒を置いて行ったりはしれないと思うから。

夫は素晴らしい医師であり、三十七歳という若さですでに揺るぎない地位が確立され

ている。将来は医局長になる話まであるという夫は、何か悩みがあってもそれを表に出したりはしないのかもしれない。

万里緒がぐるぐると考えながら隣の夫を見ていると、寝ているとばかり思っていた夫の手が万里緒の背中を撫でた。

「おはよう、万里緒」

「おはよう、千歳」

夫の千歳はにこりと笑った。それから時計を見てため息。

「もう起きないとね」

「はい。そういえば、消化器内科と消化器外科の合同忘年会、二十二日に決まりましたよ」

「そう。行くの？」

「だって、ホテルでやるらしいですよ。行かないと損です」

内科と外科合同の忘年会はいつも多くの人がある。だからいつも会場を取っていたのだが、今回は豪勢にも高級ホテルでやるらしい。先輩医師の阿部も、子どもを預けて妻を連れてくるそうだ。

「女性も男性もドレスアップ必須、だそうです」

「じゃあ、スーツ？」

「そうですね。私はドレスです」

千歳が万里緒を見て笑みを浮かべる。万里緒の好きな笑顔。

「楽しみだな」

そうして話しているだけで、すでに時計の針は十分以上進んでいた。

二人でやばいな、と言いながら起き上がって支度をする。

今日も医師としての仕事が残っているから。

* * *

あつという間に十二月二十二日。

今日は、消化器内科と消化器外科の合同忘年会の日だというのに……

「わりーな、マリオ。俺、奥さん迎えに行ってくるから。後輩の里川さとかわと福本ふくもとは患者数多いし、可哀そうだろ？」

バン、と阿部に肩を叩かれて、くそう、と思う。

もう時間は午後四時半。仕事もラストスパートだというのに、そのラストスパートで新患の入院を任された。確かに万里緒の後輩医師たちはいっぱい患者を抱えているので、普通に考えれば少し余裕のある万里緒が受け持つのが自然だ。しかし、今日は忘年会で、ドレスアップで、高級ホテルなのである。

「たぶん出血性胃潰瘍。内視鏡得意だろ？ クリップしてトロンピン散布して、今日は欠食にして、点滴やったらOK。ああ、もちろんピロリ菌検査忘れるなよ？」

そう言って帰る用意をする阿部を見て、まだ退社には早いですが、と思つた。

「もう帰るんですか？」

「おお。だつて、俺今日は半日勤務の予定だもん」

「じゃあ、なんでこんな時間までいるんですか？」

「暇つぶしじゃん？」

仕事してないと思つたらそうだったのか。じゃあ早く帰れよ、と思ひながら万里緒は頭の中で阿部をドツク。

「わかりました。引き受けます。さつさと終わらせて、必ず忘年会に行きます。ビール飲みたいし、星奈先生も来るので」

「星奈が来るからなんだよ」

「一緒にいたいじゃないですか」

「だからって急ぐことないんじゃないか？ 一緒にいたつて、別にラブな雰囲気になるわけでもあるまいし。お前たちつて、まるで政略結婚みたいだもんな」

ははは、と阿部は笑うが、それは万里緒にとつて禁句のフレーズ。だつて、そんなことないし、そんなことないと信じてるし。

阿部の心ないセリフに傷つきながら、万里緒は下唇を噛む。すると阿部は笑いを引つ込め、まじまじと万里緒を見た。

「……なんだよ、マリオ」

「なんだよじゃないですよ！ 言つていいことと悪いことがあるんですよ！」

大体なんで、そんなふうに見られるんだろう。出会つてすぐに結婚したからだろうか。万里緒の実家が藤崎病院だからだろうか。なんにせよ、こればかりは頭にきたので、思つていたことをぶちまける。

「阿部先生みたいに、チャライ男を旦那にした奥さんはすごいですよ。デリカシーもなければ、アルハラ、セクハラ当たり前じゃないですか。いつも、私我慢してるんです。

それに、政略結婚なんかで私は星奈先生と結婚したりしません！ そこんとこ、きちんと認識の修正をお願いします」

言い捨てて医局を出る。

万里緒は無理やり気持ちを切り替えて、受け持った新患について考える。それでも、廊下を歩きながら悔し涙が滲んでくる。

ただでさえ、千歳は自分としようがなく会つてくれたと思つている万里緒は、周りから政略結婚と言われると悲しくなる。昨日だつて愛し合つたし、好きだと言われた。千歳が万里緒のことを本当に好きになつてくれたから結婚したと思つているし信じている。

なのに、あんなことを言われるのは本当に心外で。

「もう、本当に馬鹿！」

今から患者を受け入れると忘年会には遅れそうだが、これも万里緒の仕事なのである。

* * *

どうにか患者を落ち着かせて、きちんと指示を出し終えた万里緒が、会場のホテルへ向かったのは午後八時を過ぎた頃だった。

アッシュピニングのアメリカンスリーブドレスに、同色系のショートエナメルブーツ。

数年前、友人の結婚式用に購入したものだが、なかなか着る機会がなく今回久しぶりに出してきた。

忘年会は午後七時から始まっていたのに、ずいぶん遅れてしまった。万里緒は、ホテルのクロークに上着を預けて、忘年会の会場へ急ぐ。

さすがに高級ホテルと言われるだけのことはあって、本当に綺麗だ。やっぱり違うのは内装。今は時期的に、クリスマス仕様になっていて、細部まで手を抜いていないオシャレなデコレーションが目を引く。

綺麗なシャンデリア、綺麗なソファーと内装。もう、女のときめきを随所に詰め込ん

だようなホテルだ。

「私も女だなあ。こういうの見てると、なんかトキメクよね……」

病院で先輩医師に言われた嫌なことは、目の前のこれでリセットできそうだと思えた。しばらくの間、万里緒が煌びやかな内装に見入っていると、後ろから万里緒と呼ぶ声がした。振り向くとスーツを着たひと際目を引くカッコイイ人。

黒のスリムなスーツにドット柄がらのネクタイ。長身でスタイルのいい彼には、はまり過ぎるくらい似合っている。

周囲の視線を集めながらこちらに歩いてくる姿があまりに素敵で、万里緒も思わず見惚れてしまった。よく知っているはずの千歳がまるで別人のように思える。

「なに呆けてるわけ？」

「へっ？」

やっぱり千歳だ、と思いつながら目の前に立った千歳をじっと見る。いつもと違い、軽く髪の毛をセットしているから余計にカッコイイ。

「遅かったね」

まじまじと見ていると手を差し出されて、またその手をじっと見る。相変わらず綺麗な手だった。

「ほら、手」